地方自治ここにあり　首長インタビュー

「強く」「優しく」「美しい」美浜町へ コミュニティを大切にするまちづくり

和歌山県初の女性町長　籔内美和子さんに聞く

地方自治の最前線の動きを紹介する首長インタビュー、今回は2月に行われた日高郡美浜町の町長選挙で現職を破って当選、和歌山県で初めて誕生した女性町長籔内美和子さんに町政担当への決意と政策をお聞きします。聞き手は本研究所鈴木裕範常務理事です。

籔内美和子町長

立候補を決断させた子と母親をつなぐ思い

鈴木：和歌山県で初めての女性町長です、皆さんの注目度が高くて大変かと思います。

町長：総会とかいろいろな行事がありまして、挨拶を考えるだけでも大変ですけれども、原稿は自分で書いています。自分の言葉で伝えたいと思っています。

鈴木：お会いする皆さんの接し方はいかがですか。

町長：やっぱり気を遣っていただいています。でも、私、男勝りなので、皆さんによく男前やと言われるんです。

鈴木：そうですか。でも、男前も今回の町長選挙は、様々な意味で決断、勇気が必要だったかと思います。現職の壁、首長への道は女性候補にとって大変高い天井です。その中で籔内さんを町長に押し上げた最大の力は何だとお考えですか。

町長：本当に悩みました、眠れないくらい。私、退職する前に健康推進課で子育ての関係を勉強させていただきまして、今後、少子化の中で、生まれてくる子どもたち、またお母さんたちと、どれだけつないでいけるかということを考えたら、出産をして子育てもしてきたものが分かると感じ、決断したんです。応援したいということで事務所に集まっていただいた女性の方が大変多くいました。そういう皆さんに押し上げていただいたと思っております。

鈴木：お考えに共鳴した女性たちがたくさんいたと。

町長：そうです。もちろん高齢者についても、私の夫は37年間、社会福祉協議会に勤めておりまして、高齢者の施策をたくさんしてまいりました。２人で一緒に退職したものですから、夫の力も大きく、高齢者の方の、私たちを見捨てないでねっていうお声も頂いてまして、その人たちにも応援していただきました。

鈴木：政策の第一は、女性が暮らしやすい地域をどのようにつくっていくか。美浜町も人口減少、少子高齢化の厳しい状況にあるなかで、どう町政を担当していくか、手腕が問われます。キャリアが活かせますか。

町長：キャリアというよりも、住民の皆さんとのつながりでしょうか。私は37年間のうち19年間、住民課におりましたので、住民のほとんどの方とは顔見知りに

わかやま住民と自治
発行／和歌山県地域・自治体問題研究所
和歌山市太田2丁目14-9　太田ビル203号
TEL･FAX 073-488-3127
jichiken@crux.ocn.ne.jp　2019年 6月号
2019年5月25日発行　第309号　（月300円）

目　次

地方自治ここにあり　首長インタビュー
「強く」「優しく」「美しい」美浜町へコミュニティを大切にするまちづくり
和歌山県初の女性町長　籔内美和子さんに聞く …… 1
第8回わかやま住民要求研究集会記念講演⑤
KPI数値の追求より住民と一緒に考え･行動する
京都大学大学院教授　岡田　知弘 …… 5
１人区で、自民党幹事長の地元・御坊で、なぜ、勝利できたのか①
―　全国ニュースになった和歌山県議選御坊市区　―
くすもと文郎はげます会　大川　克人 …… 8

なっております。公だけでは無理なところ、防災でもそうですけれども、住民の皆さんとともにまちづくりできたらなと思っています。

鈴木：町民は何を期待していると思いますか。

町長：スピード感ですね。これは、できない、これはもうすぐできますとか、回答をしていかないといけない。そういう面では、職員としっかりコミュニケーションをとって、リーダーシップもとっていかないといけないと思っております。

鈴木：スピード感のある行政ですね。

町長：はい。

美しい煙樹ヶ浜海岸

まちづくりは コミュニティの構築から

鈴木：町長が掲げる「強く」「優しく」「美しい」というスローガンの町は、どのように実現していきますか。

町長：３つのスローガンに共通することなんですけれども、やはり私はコミュニティが大切であると思っています。地域の強いつながりがあってこそ、防災にも強いまちづくりができますし、住民にも優しくなれます。美しい町も実現できると思っています。地域福祉が進んでいる地区もあります。そういうところをモデルにして、進めていけたらなと思っております。自助、共助にはやっぱり住民同士の強いつながりということも必要ですので、まずは子どもと高齢者とか、他世代交流して、お互いに刺激しあい、支えあえるようなコミュニティづくりをしていきたい。

鈴木：なるほど。

町長：コミュニティができているから町も美しいんだよとか、住民同士がつながっていれば、いろんなことが自主的にしてもらえるんじゃないか。とにかく、住民同士の強いつながりがしっかりできればいいなと思っています。

鈴木：社会経済が変わる中で、町のコミュニティも変わってきていますね。

町長：そうですね。今、「いきいき百歳体操」というのが全地区に広められて、皆さん一緒に体を動かして、津波のときには逃げる体力をつくりましょうという助け合いが復活してきているような気がするんです。それにサロンをくっつけて、皆さんで介護なんかで、どこも行けなくなっている方を見守れるようになればいいと考えているところなんです。

鈴木：コミュニティ力ですね。

町長：進んでいるところでは、若い人たちが高齢者の大型ごみを収集場所まで持っていってあげる地区があります。

鈴木：地域福祉という面で注目している地域・団体はありますか。

町長：「おせっかいクラブ」ですかね、名称は分からないんですが、区の役員の皆さんがつくられて、夏まつりをしたり小さい子どもから高齢者が一緒に集まる場所をつくる動きが広まってきています。

安心して出産、子育てができるまちへ

鈴木：美浜町は、人口減少、若い世代の流出が続いていますが、和歌山県の平均よりも出生率が低い、未婚女性が多いことも課題になっています。なぜなのでしょうか。

町長：若い人の出会いの場が少なくなってきていることもあると思うんです。とにかく妊娠して子どもを産み育てたら安心できるよという町になれば、結婚にも踏み切れるのかなという思いもあります。だから妊娠期から妊婦としっかりつながって、生まれてくる全員の子どもに行きわたるような施策をしていかないといけないと思っているところなんです。

吉原公園で遊ぶ親子

鈴木：具体的にはどういうことでしょうか。

町長：まず、子育て世代包括支援センターは、２０２０年度末までにつくりなさいよというのはあるので、もちろんそういうセンターを設置して、しっかり、その家族とつながれたら子どもの虐待とかも未然に防げるのかなと。補助金とかではなく、安心して子育てができるような心でつながっていきたいという思いですので、この４月からは、出産されたご家族に自筆でお祝いの手紙を差し上げ、子

育てで困った事があれば保健師に相談してくださいとも記載し、ご家族と心でつながっていきたいと思っております。

鈴木：役場は、一般住民には敷居が高い面があります。

町長：そのように考えまして、まずは、町長室へ来てくださいと広報で呼びかけ、もう何人かのご婦人の方々に来ていただいてお話しております。私を小さいときから知ってくれてる女性たちですので。どんどん増えてきたら本当にありがたいなと思っております。

鈴木：女性の皆さんの声を聞くひとつの方法ですね。

「笑顔を創るまちづくり」は、町長が現職の課長のときに関わった総合戦略だったと思いますが、どう具体化していきますか。

町長：子どもたちが本当に少なくなっている中で、子どもの笑顔が増えればと願っています。子どもの心を育てていくためには、妊娠期からお母さんたちとつながって、元気な赤ちゃん、子どもを産み育てていただきたいというのも1つですし、とにかく子どもたちには、たくさんの経験をしてもらい、多くの人とふれ合ってもらいたい。そうすることで、心が育つと思うんです。子どもたちが大人になっていく過程で、どんな状況にも耐えてもらえるような子どもの心を育てたいという思いがあるんです。

三尾アメリカ村の「カナダミュージアム」

医療費無料化を高校卒業まで

鈴木：子育て支援の政策で、本年度にこれだけはぜひという事業をお聞かせください。

町長：まず、住民の方から多くの声を頂いている子どもの医療費無料は、美浜町は中学校卒業までなんです。18歳までの医療費無料ということを掲げておりましたので、この1年間でスピード感を持ってやっていけたらなという思いはあります。

鈴木：予算の裏付けが大変だと思います。

町民が安心して暮らせるためには産業政策、仕事づくりが重要です。この問題はどうされますか。

町長：昔は、私どもの町は会社員だったり、公務員が多かったんです。だから住んでいただくように住環境整備に力を入れるという、町だったものですから、美浜町から外に勤める方はとても多いです。

鈴木：御坊のベッドタウンですね。その間に産業づくりが進まなかった。

町長：農業、漁業のいずれも、後継者不足で深刻な問題となっています。もうかる産業というのがあれば、後継者問題も解決できるんではないかなと常々思っているんですが、なかなか一朝一夕にはいかないところなんです。農業については、農地の活用支援事業補助金を交付しておりまして、優良農地の保全と耕作放棄地の抑制を図っているところなんですけれども、今後さらに高齢化になってきますから、農作業労力の軽減とか生産性の向上に努めていかなければならないと考えております。野菜花き産地総合支援事業補助金交付もやっておりますが、農業者の生産経営の意欲というのは強く感じているところです。漁業についても、非常に厳しい環境にあると理解しています。それぞれの従事者とつながって、支え合って取り組んでいけたらと思っています。

鈴木：美浜町の農業で特徴的な特産物といいますと。

町長：一番多いのはキュウリです。松キュウリというのは、松葉を堆肥化して、それで育ててるキュウリです。そして松イチゴ、松トマトは1軒ですけど、松キュウリは何軒かの方がやっております。

鈴木：松葉を堆肥にする循環型農業ですね。ブランド化を期待しています。

ところで、美浜町は日ノ岬、三尾、そして煙樹ヶ浜と海岸美と海が魅力の町です。地域資源として、積極的に観光政策に活かしていく、もっと観光に力を入れてみようというお考えはいかがですか。

子ども医療費助成

通院・入院とも	高校卒業まで	御坊市　紀美野町　広川町 有田川町　日高町　日高川町 みなべ町　印南町　すさみ町 太地町　古座川町　北山村
	中学校卒業まで	和歌山市　海南市　紀の川市 岩出市　橋本市　有田市 田辺市　新宮市　かつらぎ町 九度山町　高野町　湯浅町 **美浜町**　由良町　白浜町 串本町　那智勝浦町　上富田町

カフェから始まる人びとの出会いと交流の場

町長：本当にたくさんのお金が落ちるような観光になれば力を入れたいとは思っているんですけれども。

地方創生事業で、吉原地

区の松林の中に建物２つを建てて、一般社団法人の方にそこを任せて、４月14日にフルオープンしました。松林も活かしながら、「松カフェ」をやっていただいています。子育て世代の人を集めたり、カフェをしたり、レストランもそういう方に貸出しながら、いろんなお店が、日に日にオープンをするわけなんです。

鈴木：新たな人びとの出会いと交流が生まれる場に育つ可能性がありそうですね。

町長：カフェは最近増えています。御崎神社から降りてきたところにも新しいカフェができていまして、そこは今人気と聞いています。

松てるわ広場の「松カフェ」

鈴木：アメリカ村の三尾はどうなのですか。

町長：アメリカ村の方は地方創生で、今、ＮＰＯ法人でカナダミュージアム、それとレストラン、ゲストハウスを運営しています。それと子どもたちが英語で案内できるというようなシステムもできつつあるんですけれども、もう少しアピールしていかないといけないなというのはあります。それとクヌッセンのお話はね。

鈴木：その辺のところが観光資源の最大のポイントですか。

町長：カナダミュージアムは、地方創生事業で、ご寄附いただいた建物を補助金で改装しました。

鈴木：美浜町は、きらりと光る観光地になってほしい。カナダ移民の村、三尾村の話はやっぱり大事にしてほしいですね。

地域コミュニティが継続する防災対策

鈴木：ところで、南海トラフの発生の確率も高まっています。海に面した町の防災対策ですが、大きな課題です。

町長：ハード面は、人口的に高台を建設しまして、避難困難地域というのは解消しています。今後も計画しています避難タワー等、避難施設をこの社会情勢を勘案しながらですが、スピード感を持って進めていきたいと思っています。ソフト面につきましては、所信表明でも申し上げたんですけれども、避難行動、要支援者の対策とか、自助、共助、公助について啓発、地域防災計画の強化とか、自主防災会の人材育成、組織強化について支援し、小中学校の防災教育推進とかにも取り組んでいきたいと思っています。南海トラフ巨大地震による当町の浸水域は、町全体の46・1パーセントで、住宅地では約90パーセントとなっていますので、災害発生した場合、１日でも早く復興へ進めるように、今回、和歌山県で最初に、復興に関する事前準備計画というのを策定しました。まず、住宅が浸水しましたら、もう仮設住宅を建てるところを準備してまして、それを地域コミュニティも継続しながら仮設住宅をつくっていくという計画なんです。それを、県と一緒に東京にある自民党の災害対策本部の小委員会に説明に行ってきました。

鈴木：避難場所として大丈夫なのでしょうか。

町長：浜ノ瀬地区に安政の津波のときに、こういうところの高台へ逃げろという碑があるんです。今回そこに高台をつくっています。地区で言いますと新浜地区になります。

鈴木：籔内町政で、美浜町は変わったと、町民に見える形で示す必要があるかと思います。決意はいかがでしょうか。

町長：そうですね、元号も変わり令和になりましたけれども、町長としての１年目でもございますので、とにかく皆さんと距離感をなくして、しっかりつながっていきたい。まずやっぱり子育ての関係で有言実行していきたい。

新浜地区につくられた避難高台

鈴木：妊婦のときからの新しい施策というのは。

町長：産後ケアと言いまして、核家族が増えていますので、子育てに入りますと、どうしても産後鬱という問題も出てきます。そういう人たちを産後ケアしてあげるとか、それと新生児の聴覚検査がありますけれども、それも補助したいと考えています。高校生までの医療費の無料化、これも実現していきたい。

鈴木：本日はありがとうございました。

第８回わかやま住民要求研究集会記念講演 ❺

KPI数値の追求より住民と一緒に考え・行動する

― 小規模企業比率日本一の和歌山県が、中小企業施策を講ずるのは当然 ―

京都大学大学院教授　岡　田　知　弘

岡田知弘氏の講演録もいよいよ今回で最後になります。国は、ＩＴ企業はじめごく少数の企業グループの言いなりに、行政サービスの効率化と市場化を進めようとしています。これに対して、小さくても輝く西米良村の実践を紹介しながら、地方自治体の本来のあり方を問いかけます。

（文責・研究所　西岡　敏）

岡田知弘氏

議会制度改革とＡＩ活用で職員削減

二〇一八年、総務省の２つの研究会が提言を出しました。まず３月に、町村議会のあり方に関する研究会が、小規模自治体をターゲットにした議会制度改革を提言しました。高知県大川村での村民総会方式の検討に着目して、小規模自治体で議員の担い手が少なくなることへの対応策です。ところが、地方自治体関係者、議員関係者が入らない研究会で、３つのメニュー（図①）が示されました。１つは、多数の住民が参加するけれども、意志決定できる事項を限定し、重要な案件は決定できないようにする。もう一つは、アメリカのような集中専門型議会方式で少数の人に任せてしまうやり方。そして今のやり方。この３つから選択してもらおうということを公然と打ち出しました。町村会も町村議長会も地方自治の侵害だと猛反発です。

さらに自治体戦略２０４０構想研究会が、７月に出した報告書をもとにした議論が、第32次地方制度調査会の下で進行中です。この内容は、増田レポートの人口減少論を前提にＡＩを活用して、２０４０年には、半減した公務員の数でやっていけるようにする。そのため成長領域のシェアビジネス（車をシェアするとか）に丸投げする。これをプラットホーム・ビルダー（図②）と呼びます。そして都道府県と市町村の二層制を壊して柔軟化していく（図③）。これは、県境を越えた連携や道州制も想定しています。

行政サービス効率化と民間任せ

圏域行政の標準化を図るため、地方自治法を改正して連携中枢都市圏（人口30万人単位）を全国いたる所につくり、そこに都市計画とか防災とかに関わる行財政権限を与えることも検討しています。そうなると基礎自治体の役割がぐっと減る。これは平成の大合併の際の西尾勝私案と同じ。小規模自治体は能力がなく不効率だから、隣の市に行政サービスを任せていく、あるいは県に任せていく特例町村制と一緒です。これが再び出されてきており、行政サービスの効率化と市場化を併せて行なおうとしています。

この改革を主導してきたのが、総務省の山崎重孝氏（現内閣府事務次官）です。彼は、国がいかに地方を合理的に統治するかという視点で論文も書いています。『ガバナンス』の特集号では、片山善博前鳥取県知事（元総務大臣）をはじめとして、ほぼ全員が２０４０構想を批判しています。ＩＴ企業をはじめとするごく少数の企業グループが、こういう自治なき地方行政サービス体に変えようとしているのが、今の地方自治をめぐる最新の局面です。

自治体戦略批判のブックレット

自民党内では岸田会長の下で、特命委員会が骨太方針に対して、２０１９年度末に、今の市町村合併の法律が期限切れを迎えるのに伴い、既存の枠組みで市町

図①

⇨ 現行議会のあり方を維持できることを前提に、「集中専門型」と「多数参画型」という新しい２つの議会のあり方を条例で自由に選択可能とする。　（※ 小規模市町村においては、①現行議会 ②集中専門型 ③多数参画型 の３つの選択肢を持つこととなる）

＜集中専門型＞

【イメージ図】

【ポイント】

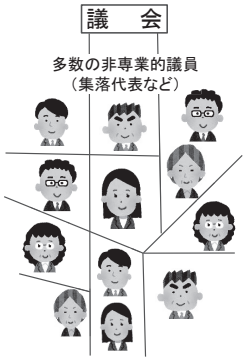
- 少数の専業的議員による議会構成とし、豊富な活動を想定。生活給を保障する水準の十分な議員報酬を支給する。
- 女性や若者など、多様な民意を反映させるとともに、住民が議会活動に関わる経験を得られる仕組みとして、（裁判員と同様）有権者からくじその他の作為が加わらない方法で選ばれる「議会参画員」制度（※）を設ける。
- 勤労者の立候補に係る休暇の取得等を理由とした使用者による不利益取扱いを禁止する。
- 公務員は、立候補によって職を失うこととなるため、公務員が立候補により退職した場合の復職制度を設ける。

（※）議会参画員イメージ

【役割】 条例、予算その他の重要な議案について議員とともに議論（議決権なし）
【費用弁償】 職務を行う日ごとに費用弁償を支給
【選任手続等】 くじその他の作為が加わらない方法で選定、一定の辞退要件などを設定

＜多数参画型＞

【イメージ図】



【ポイント】

- 多数の非専業的議員による議会構成とし、夜間・休日を中心とする議会運営を行う。
- 契約の締結などを議決事件から除外することなどによって、議員の仕事量・負担を軽減し、それに見合った副収入的水準の議員報酬を支給する。
- 上記の議決事件の除外とあわせ、議員の請負禁止を緩和するとともに、他の地方公共団体の常勤の職員との兼職を可能とする。
- 勤労者の立候補及び議員活動に係る休暇の取得等を理由とした使用者による不利益取扱いを禁止する。
- 各市町村の集落や小学校区を単位とした選挙区を設けて選出する。

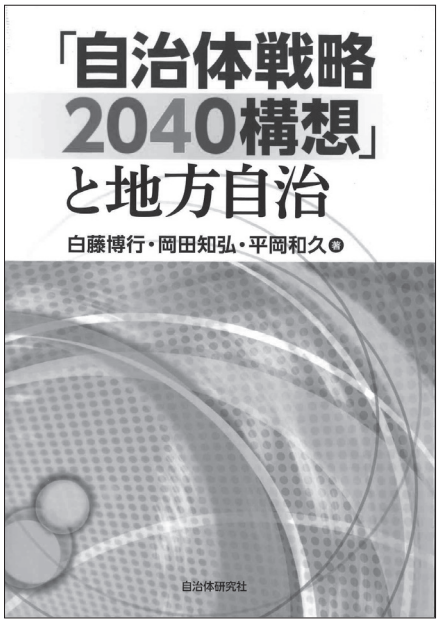
村合併が進まなかった地域に関してさらなる合併を推進する法律を準備すべきであると提言しています。自治体問題研究所では、この自治体戦略２０４０を批判するブックレットを出版しました。自治体を住民のものではなくて、ごく少数の者にするための改造が着々と進んでいることに改めて注意してもらい、一人一人の住民が基本的人権、そして幸福追求権を実現できるような住民主体の自治体をつくるべきではないかと書いています。

小さくても輝く西米良村の実践

西尾私案が出たあと、小さくても輝く自治体フォーラムを毎年開いています。小さな自治体は、２００２、３年の合併問題以来、反対だけではなくて、住みやすい住民主体の地域をつくっていくための交流をずっとやってきました。その中で、人口を維持、増加させている自治体も出てきました。

宮崎県西米良村の村長が増田レポート直後のフォーラムで、注目すべき発言をしています。厚生省の人口研が94年時点で西米良村のシミュレーションをして、２０１０年には７４８人になるとしていた。ところが２０１３年４月時点での村の人口は１２４９人。大きな誤差ですよね。ここではかなり前から、西米良型ワーキングホリデー事業という主体的な取り組みがあったんです。夏に都会から来た若い人に、ブルーベリー等の収穫労働を村のコテージに住みながらやってもらっていたら、定住して結婚する人たちが出たんです。そして赤ちゃんが生まれたら、高齢者が元気になってくるんです。第三セクターの「米良の庄」という地域づくりの拠点で、土産物とか食事を出している女性の高齢者グループが元気になっています。また、ここの職員が、岩風呂の掃除費用がかかると言ったら、90歳を超えるじいちゃん、ばあちゃんが、「朝風呂会」をつくって、営業前に、楽しくしゃべりながら掃除をするんです。コストダウンと健康づくり。お土産物とか、食料品の工夫で生きがいができるのと、赤ちゃんが増えてくると元気になってきます。コミュニティをしっかりとつくっていくことによって、定住基盤が広がるんですね。結果的に若い人たちがやって来て、赤ちゃんが生まれて、人口が増えて、そしてお年寄りが山から下りなくなったのです。

最後に村長が言ったことが、印象的でした。「自分たちは、ＫＰＩ数値の追求ではなく、住民の幸福度を上げるために住民の皆さんと一緒に考えて行動しているだけだ。その結果として、この数字が出てきているんです」。地方自治体の本来の在り方は、こういうところにあるんではないか。こ



自治体戦略2040を批判するブックレット

図②

スマート自治体への転換

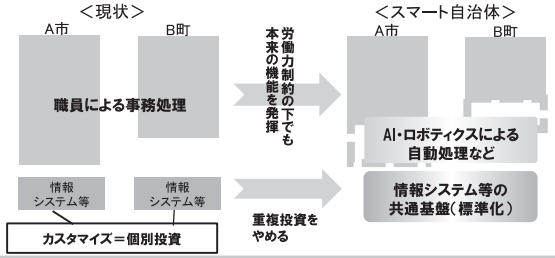
＜破壊的技術（AI・ロボティクス等）を使いこなすスマート自治体へ＞

- □ 経営資源が大きく制約されることを前提に、**従来の半分の職員でも自治体が本来担うべき機能を発揮**できる仕組みが必要。
- □ 全ての自治体で、**AI・ロボティクスが処理できる事務作業は全てAI・ロボティクスによって自動処理**する**スマート自治体へ転換**する必要。

＜自治体行政の標準化・共通化＞

- □ **標準化された共通基盤**を用いた効率的なサービス提供体制へ。
- □ 自治体ごとの情報システムへの**重複投資をやめる枠組み**が必要。円滑に統合できるように、**期限を区切って標準化・共通化を実施**する必要。

⇒ 自治体の**情報システムや申請様式の標準化・共通化**を実効的に進めるためには、**新たな法律**が必要となるのではないか。



公共私によるくらしの維持

＜プラットフォーム・ビルダーへの転換＞

- □ 人口減少と高齢化により、公共私それぞれのくらしを支える機能が低下。

⇒ 自治体は、新しい**公共私相互間の協力関係**を構築する**「プラットフォーム・ビルダー」**へ転換する必要。

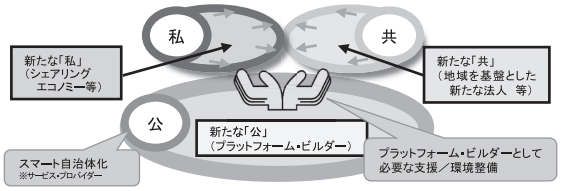
- □ 共・私が必要な人材・財源を確保できるように**公による支援や環境整備**が必要。

＜新しい公共私の協力関係の構築＞

- □ **全国一律の規制を見直し**、シェアリングエコノミーの環境を整備する必要。
- □ ソーシャルワーカーなど**技能を習得したスタッフが随時対応する組織的な仲介機能**が求められる。

＜くらしを支える担い手の確保＞

- □ 定年退職者や就職氷河期世代の活躍の場を求める人が、**人々のくらしを支えるために働ける新たな仕組み**が必要。**地域を基盤とした新たな法人**が必要。
- □ 地方部の地縁組織は、**法人化等による組織的基盤の強化**が必要。



ういう自治体が全国各地にあります。

地域を学び国政を変える

大きな自治体では、区地域自治協議会をつくることができます。これは地域自治組織ということで、大きな自治体でも、その中に小さな自治体をつくって、地域の協議員を自分たち自身で選び出して、そこに財源を付けていく。こういう形でやれば、それぞれの個性に合わせた地域づくりが、産業面でも生活面でも国土保全面でもできていきます。

産業面で最も私が注目しているのが、中小企業振興基本条例です。地域を担っているのは中小企業者、小規模企業者。和歌山県の場合には、小規模企業比率が日本で最も大きいと言われていますが、企業のうち99・9パーセントが中小企業ですし、中小企業で働いてる人も91・9パーセントを占めます。住民の9割が中小企業や農家関係者だということです。そのために行政施策を講ずるのは、当たり前のことです。当たり前の行政を進めていくことで幸福度を上げていくことが、今必要になってきていると思います。それを前提に一人一人の市民と議論しながら市民連合をつくり、そして野党連合をつくり、大きく自治体行政の在り方を変える。さらに国政を変えていく一つの力になる。これは先進国共通の方向ではないかと思うんです。そのためには、地元がどうなっているか、どうするかを皆さん方がお互いに報告し合って、学び合うことが最も大切です。

和歌山県には県地域・自治体問題研究所があります。そこに入り、かつ「まち研」を是非つくってほしいと呼びかけています。市町村ごとに地域のことをしっかりつかんで政策づくりをやって、それを具体化していく取り組みをする組織ですので、これを是非広げていただき、地域から日本、そして世界を変える取り組みの一端を担ってもらったら大変有り難いと思います。

岡田知弘先生は、３月末で京都大学を退職されました。４月１日付で京都大学名誉教授・京都橘大学現代ビジネス学部教授になられました。

図③

圏域マネジメントと二層制の柔軟化

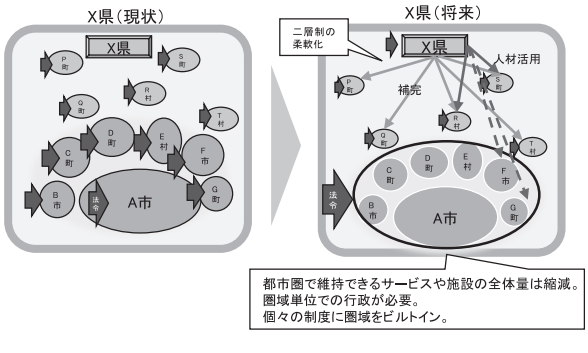
＜地方圏の圏域マネジメント＞

- □ 個々の市町村が**行政のフルセット主義から脱却**し、**圏域単位での行政をスタンダードに**し、戦略的に圏域内の都市機能等を守る必要。
- □ 現状の連携では対応できない**深刻な行政課題への取組**を進め、広域的な課題への対応力（**圏域のガバナンス**）を高める仕組みが必要。
- □ **個々の制度に圏域をビルトイン**し、連携を促すルールづくりや財政支援、連携をしない場合のリスクの可視化等が必要。

⇒ **圏域単位で行政を進めること**について**真正面から認める法律上の枠組み**を設け、中心都市のマネジメント力を高めることが必要ではないか。

＜二層制の柔軟化＞

- □ **都道府県・市町村の二層制を柔軟化**し、それぞれの地域に応じ、都道府県と市町村の機能を結集した行政の共通基盤の構築が必要。
- □ 核となる都市がない地域では**都道府県が市町村の補完・支援**に本格的に乗り出すことが必要。
- □ 都道府県・市町村の垣根を越え、**専門職員を柔軟に活用**する仕組みが必要。



1人区で、自民党幹事長の地元・御坊で、なぜ、勝利できたのか ①

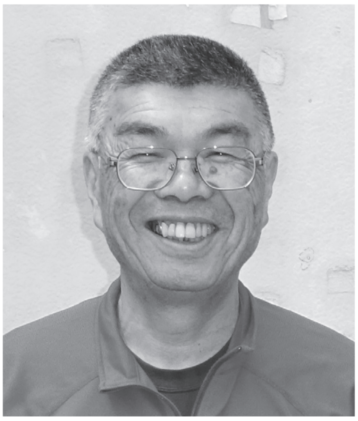
― 全国ニュースになった和歌山県議選御坊市区 ―

くすもと文郎はげます会　大 川 克 人

統一地方選挙前半戦の投票日翌日、4月8日の「しんぶん赤旗」のトップ記事に「1人区和歌山・御坊市で議席」という見出しが躍りました。同日の読売新聞和歌山版でも「共産・楠本さん現職破る」という見出しで大きく報じられました。

注目されたのは、1人区で、自民党幹事長の地元で、9期目をめざす現職自民党候補と1対1の選挙戦に勝利したことです。

その一部始終を見てこられた「はげます会事務局」の大川克人氏に寄稿していただきました。


大川克人氏

はじめに

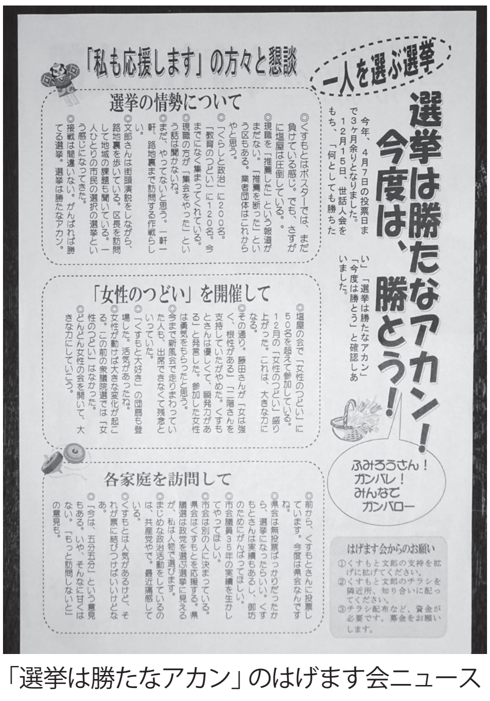
1人区で勝利したのは、「くすもと文郎」という最高の候補者を擁立できたということが最大の要因ですが、3点に集約できると思います。まず一つ目は、「くすもと文郎はげます会」の存在です。二つ目は、日本共産党と市民の共同の闘いがあったということです。三つ目は、その根っこにある「支配と圧力」「利益誘導の政治」に対する不満が爆発し、勝手連が大きく広がったことです。これらが相互的に影響しあい、自民党幹事長（二階俊博氏）の地元で、もと幹事長の秘書、8期連続当選の自民党現職に勝ったのです。

1．はげます会の存在

２０１８年、くすもと文郎は35年間の市議の実績を持ち、衆議院選挙に日本共産党公認で和歌山三区から立候補しました。現職の自民党幹事長、二階俊博氏との一騎打ちです。立候補を前に、日本共産党だけでなく多くのみなさんとともに闘おうと、「くすもと文郎はげます会」を結成しました。日本共産党はもちろん、地元塩屋地区の住民のみなさん、同級生、反二階・反自民のみなさんが、がんばりましたが、結果は落選しました。しかし、御坊市では43％を獲得し、二階氏にあと一歩まで迫りました。そのときの「はげます会ニュース」には「選挙は勝たなアカン。今度は勝ちたい」と総括しています。

衆議院選挙後、「今後も、くすもと文郎の政治活動を応援しよう」と、「はげます会」を継続することを確認しました。代表世話人会では、「今後どうするのか」が大きな議題になり、続けて三区の候補者になるのか、県議選に立候補するのか、御坊市長選に立候補するのか、いくつかの選択肢がありました。議論の結果、県議選に日本共産党公認で御坊市選挙区から立候補することを、世話人会で決定しました。

くすもと文郎氏は、「今まで御坊で35年間、日本共産党の旗を掲げがんばってきた。県議に挑戦するなら、日本共産党公認で御坊市選挙区から挑戦したい。無所属や日高郡区からでは、今までの活動が否定されるこ


一人を選ぶ選挙

選挙は勝たなアカン！今度は、勝とう！

今年、4月7日の投票日まで3ケ月余りとなりました。12月15日、世話人会をもち、「何としても勝ちたい」「選挙は勝たなアカン」「今度は勝とう」と確認しあいました。

ふみろうさん！ガンバレ！みんなでガンバロー

「私も応援します」の方々と懇談

選挙の情勢について

◎くすもとはポスターでは、まだ負けている感じ。でも、さすがに塩屋は圧倒している。。
◎現職を「推薦した」という報道がまだない。「推薦を断った」という区もある。業者団体はこれからやと思う。
◎「くらしと政治」に200名。「教育のつどい」に120名。今までになく集まってくれている。
◎現職の方が「集会をやった」という話は聞かないね。
◎まだ、やってないと思う。一軒一軒、路地裏まで訪問する作戦らしい。
◎文郎さんは街頭演説をしながら、路地裏を歩いている。区長を訪問して地域の課題も聞いている。一人ひとりの市民の選択の選挙という感じになってきた。
◎接戦は間違いない。がんばれば勝てる選挙。選挙は勝たなアカン。

「女性のつどい」を開催して

◎塩屋の会で「女性のつどい」に50名を超えて参加している。12月の「女性のつどい」盛り上がった。これは、大きな力になる。
◎その通り。藤田さんが「女は強く、根性がある」「二階さんを支持していたがやめた。くすもとさんは優しくて、瞬発力がある」と発言した。参加した女性は勇気をもらったと思う。
◎今まで新風会で走りまわっていた人も、出席できなくて残念といっていた。
◎「くすもと大好き」の団扇も登場した。活気があったね。
◎女性が動けば大きな変化が起こる。この前の衆議院選では「女性のつどい」はなかった。
◎どんどん女性の会を開いて、大きな力にしていこう。

各家庭を訪問して

◎前から、くすもとさんに投票しています。今度は県会なんですね。
◎県会は無投票ばっかりだったから、選挙になったらいい。くすもとさんは実績もあるし、御坊のためにがんばってほしい。
◎市会議員35年の実績を生かしてやってほしい。
◎市会は別の人に決まっている。県会はくすもとを応援する。県議選は政党を選ぶ選挙に見えるが、私は人物で選びます。
◎まじめな政治活動をしているのは、共産党やで。最近痛感している。
◎くすもとは人気があるけど、それが票に結びつけばいいけどなあ。
◎「今は、五分五分」という意見もある。いや、そんなに甘くはない。「もっと訪問しないと」の意見も。

はげます会からのお願い

①くすもと文郎の支持を拡げに拡げてください。
②くすもと文郎のチラシを隣近所、知り合いに配ってください。
③チラシ配布など、資金が必要です。募金をお願いします。

「選挙は勝たなアカン」のはげます会ニュース

とになる」と決意が話され、全会一致で確認しました。

５月15日に記者発表をするとともに、「市民の声が届く県政に」という県議の役割を明確にすると同時に、35年の市議の実績を県政に生かすこと、「防災や国保問題など、安全で安心して暮らしやすい御坊の町を」など、市政の課題を県政の課題にするという市民への訴え（政策を含め、立候補の抱負）を発表しました。

記者発表してからが、１人区で自民党幹事長の地元で自民党公認の現職に勝つというドラマの始まりです。

開催したつどいを伝えるニュース

2．選挙戦を前に大事にしたこと

まず一つ目は、県議選挙の意義についての大論議があったことです。

＊一議席を争う、とんでもない闘争に挑むことになる。

＊日高郡市合わせて４議席のうちの一つを、「くすもと文郎」でかちとること。

＊和歌山三区での二階支配を打ち破るたたかいである。

＊くすもとは９期連続当選し、御坊市議35年の実績がある。

＊共産党と郡市民の共同のたたかいをめざす。日高地方では、昨年夏の参院選と秋の総選挙では市民との共同が大きく広がり、御坊市では保守との共同、市民との共同が発展して、43パーセントの得票を得ている。

＊共産党だけでは絶対に勝てない。

＊共産党の冠をはずせないのか。

＊今さら、くすもとが共産党をはずしたら笑われる。共産党でええやないか。

＊得票目標は７０００票を超えること。総選挙は５０００票だから、あと２０００票を上乗せすれば勝てる。

この論議があったからこそ、選挙戦での反共攻撃にひるむことなく活動できたと思います。そして、率直な議論がはげます会の団結を生むことになりました。

二つ目は、学習会やつどいを開催してきたことです。第１回は「県議の仕事と役割」（50名の参加）、第２回は「教育と政治をかたるつどい」（１００名の参加）、第三回は「私たちのくらしと自然エネルギー問題」（１５０名の参加）です。候補者とともに「はげます会」全体で学習したことが、選挙戦を闘う上での理論武装となり、それが確信になっていきました。回を重ねるごとに参加者が増え、「絶対に勝とう」「今度は勝ちたい」などの感想が出されました。

三つ目は、地元塩屋地区のはげます会が、事務所を構え活動を始めたことです。「共産党はキライやけど、くすもとはええ」「塩屋の区長をやってくれたくすもとを応援するんや」「共産党の応援をするんやない。くすもとの応援や」など、それぞれが思いをもって献身的に活動してくれました。「はげます会ニュース」を持って、はげます会への入会の訴えに、各家庭を訪問するところから始まりました。その後、新しいニュースができる度に、二人一組で訪問するようになりました。５００部のニュースの配布から、隣の地区も含めて、最終は１５００部の配布をしてくれました。統一行動でのくすもとのポスター貼りは、地区内くまなく貼りだし、これで相手陣営は入れない状態をつくり出しました。

女性が個人名で応援するはげます会ニュース

３月２日のくすもと文郎大演説会

四つ目は、女性の会です。発端は塩屋の会で「どうしたら勝てるか」と話し合い、ある方が「女性の力はすごい。いったん決めたら動かない。女性にがんばってもらおう」と意見が出され、「塩屋女性のつどい」を開催し、60名が参加しました。この塩屋のとりくみから、「くすもとは女性に人気がある。女性の力を全市・全郡から集めよう」となり、御坊だけでなく日高全体で「女性のつどい」（100名の参加）を開催しました。テーブルを囲み、お菓子をつまみながら、和やかに、しかし、やる気満々の集いになりました。

五つ目は、大演説会です。3月2日、告示1ヵ月前の演説会ですが、どうなることか心配でした。参加者は約500名と、少し物足りなかったのですが、会場からの発言は参加者に感動とやる気を起こすものになり、素晴らしかったと思っています。市内でカラオケ喫茶を経営する女性は、くすもとの人柄や実行力を紹介し、政策に対する期待が語られました。塩屋の会の代表は、今度は勝ちたいと活動する「塩屋の会」の活動を紹介し、「上からの圧力政治ではなく、市民のための政治をつくって行きたい」と発言されました。選挙事務所長は、「自民党対共産党の選挙ではない。どちらが県議にふさわしいか、人物を選択する選挙である。素晴らしい候補者であり、人柄・実行力・清潔さでは絶対に勝ってる」と力強い発言があり、盛り上がりました。

3. 今、変えるとき 市民の願い 届ける人を県政に

くすもとのスローガンは「今、変えるとき、市民の願い、届ける人を県政に」です。リーフには、相手候補との関係で「働きます」をメインに「市議35年の経験を活かし、暮らし、経済、元気にする県政に」と書かれています。当初のポスターには、スローガンが「みんなで変えよう、政治の流れ」と書かれています。はげます会の政策ビラをつくる過程で、「みんなで変える」というより「今こそ、変えるときだ。そのチャンスが来ていることをアピールする必要がある」「市民と県政をつなぐ必要を訴えよう」「いろんな方が応援してくれる選挙にしよう」と意見が出され、「今、変えるとき、市民の願い、届ける人を県政に」というスローガンができました。

３・２大演説会を伝えるはげます会ニュース

市民の中に「無所属で市長に」という声が多くありました。なぜ多いかを考えると、「御坊を良くしたい」という要求の表れであると捉えました。そのためにも、御坊を住みよい街にするために、県政の課題にとりくむこと、市民と県政をつなぐパイプ役として要求実現にとりくむこと、大型プロジェクト頼りの施策から住民生活優先の施策へ変えること、文字通り「市民の声、願いを県政へ届けること」が強調され、みんなで確認しました。

市役所や郡内の町役場のみなさんとしっかり話し合いたいと思っています。

市民のための政治は、トップダウンではなくボトムアップでしか実現しません。今後も、みんなで相談しながら民主的な社会の実現をめざしたいと思っています。

（次号に続く）